

はだかの王さま

むかしむかし、とある国のある城に王さまが住んでいました。王さまはびっぴかの新しい服が大好きで、服を買うことばかりにお金を使っていました。王さまののぞむことといたら、いつもきれいな服を着て、みんなにいいなあと言われることでした。戦いなんてきらいだし、おしばいだって面白くありません。だって、服を着られればそれでいいんですから。新しい服だったらなおさらです。一時間ごとに服を着がえて、みんなに見せびらかすのでした。ふつう、めしつかいに王さまはどこにいますか、と聞くと、「王さまは会議室にいらっしゃいます。」と言うものですが、ここの王さまはちがいます。「王さまは衣装部屋にいらっしゃいます。」と言うのです。

城のまわりには町が広がっていました。とても大きな町で、いつも活気に満ちていました。世界中のあちこちから知らない人が毎日、おおぜいやって来ます。

ある日、二人のさぎ師が町にやって来ました。二人は人々に、自分は布織り職人だとウソをつきました。それも世界でいちばんの布が作れると言い張り、人々に信じこませてしまいました。

「とてもきれいな色合いともようをしているのだけれど、この布はとくべつなのです。」とさぎ師は言います。「自分にふさわしくない仕事をしている人と、バカな人にはとうめいで見えない布なのです。」

その ^{はなし} ^き話を聞いた人々はたいそうおどろきました。たいへんなうわさになつて、たちまちこのめずらしい布の ^{ぬの} ^{はなし} ^{おう} ^{みみ} ^{はい}話は王さまの耳にも入りました。

「そんな ^{ぬの}布があるのか。わくわくするわい。」と、^{ふく} ^{だいす} ^{おう} ^{おも}服が大好きな王さまは思いました。「もしわしがその ^{ぬの} ^{ふく} ^き布でできた服を着れば、^{けらい} ^{なか} ^たけらいの中からやく立たずの ^{にんげん} ^{にんげん} ^み人間や、バカな人間が見つけれられるだろう。それで ^{ふく} ^み服が見えるかしこいものばかり ^{あつ}集めれば、この ^{くに}国ももっとにぎやかになるにちがいない。さっそくこの ^{ぬの} ^{ふく} ^{つく}布で服を作らせよう。」

^{おう} ^{かね}王さまは ^{たくさん} ^{ようい}お金をたくさん用意し、^{さぎ} ^し師にわたしました。この ^{かね}お金ですぐにでも ^{ふく} ^{つく}服を作ってくれ、とたのみました。さぎ師はよろこんで ^{ひき} ^う引き受けました。

(青空文庫版)

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

大久保ゆう訳

https://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/46319_23030.html